

2020/10/25 聖霊降臨後第21主日（特定25）

東京聖三一教会 マタイ 22:34-46

司祭マリア・グレイス笹森田鶴

10月に入ってから、皆さまにとっては2回目の主日となります。ご一緒できておりますこと、本当に嬉しい限りです。

先週の説教の冒頭でも申し上げましたが、同時に、このような時期だからこそ、まだ教会に行くことにご不安を感じていらっしゃる方や、お体調によってご自宅から出られずにいらっしゃる方々を覚えます。出向かないという選択をされていることは、ご自分のみならず、ご家族や大切な方々への配慮でもあります。そのようなお一人おひとりの選を神さまが祝福してくださっていることを覚えたいと思います。

礼拝のネット配信も新たに実施しています。新しい試みですので、様々なご心配をお持ちの方もいらっしゃると思います。どうぞ些細と思われるようなことでも、ご遠慮無く牧師までお伝えください。

しばらくは、教会委員の方々を中心に準備してくださった、感染防止のための対策を皆さまに行っての礼拝となります。皆さまのご協力とご理解に感謝申し上げます。

さて、このコロナ禍で、教会のすべての営みが休止状態となっているかのような様子の時期が長くありました。けれども、もっとも大切な営みをわたしたちは続けていくことができました。それが礼拝です。もちろんその方法や参列者は普段とは全く違っていました。何ヶ月も聖職だけでささげられ、皆さんにはそれぞれの場所にて祈りを合わせていただくこととなりました。ようやく7月になってご一緒できると思いましたが、再び聖職のみの礼拝を続けなければならない事態でした。信仰的な忍耐を与えてくださるよう神さまに祈り求めていた時でもありました。

これまで、わたしたちはこの聖堂での礼拝を続けてきました。礼拝がすべての教会の営みの柱だからです。教会にとっていちばん大切なことは神さまを賛美することです。

すべては礼拝から始まります。そこで読まれるみ言葉、執行される sacrament、ささげられる祈り、それらによって造り上げられ、練り上げられ、具体的に存在する教会は、神さまだけとの交わりを実現するのみならず、時空を越えてさまざまな共同体とも交わり、それぞれの使命を果たすことができます。それは驚くべき出来事であり、わたしたちを信仰者として新しく成長させてくれます。

それほど大切な礼拝ですから、この数ヶ月で何よりも教会委員会の中でも時間をかけ、また礼拝担当の皆さまとも何度も準備してきたのも、外でもない礼拝です。その積み重ねによって、会衆もともに参加する礼拝が今このように再び捧げられています。ここまで導いてくださった神さまに心から感謝します。

そして決して待っている間、悪いことばかりではありませんでした。確かに、これまで通りに礼拝を捧げられなくなったという衝撃的な出来事は、わたしたちの足元を揺るがしましたし、心痛く悲しいことでもありました。しかし、わたしたちのありとあらゆることの中にあるべき出来事は何かということを確認にする機会であったとも思っています。

わたしたちはこれからもこの礼拝を最も大切な教会の営みとしてささげていきます。どのような事態となっても可能な限り、さまざまに工夫をして礼拝を継続していきます。他にはもろもろまだできないことがあったとしても、礼拝だけは、自信をもってわたしたちは礼拝を捧げ続けてまいりたいと願っています。それがわたしたち共同体の核だからです。

それと同じ様に、今日の福音書でも、信仰の中心を主イエスさまは明確に示してくださ

いました。しかもそれまでの宗教指導者たちの聖書の解釈やその実践において生じていることを批判し、全く新しい考え方、捉え方を提示してくださいました。

わたしたちは、この聖書箇所があまりにも有名なので、特に驚くことなく、当然大切なメッセージとして受け止めることができます。しかし、実はこのような主イエス様のような考え方はそれまで全くなかった、革命的な考え方だったのです。

それまでは、ファリサイ派のみならず、多くの律法や掟によって人々の生活が整えられていました。ものの資料によりますと、その数、律法には613の掟、と365の禁止条項があるとされており、さらにファリサイ派は口伝の掟を加えていました。

当時もどれが最も重要かという議論があったようです。それは、どのような種類の掟が最も重要かというものでした。つまり、何かひとつの掟を選ぶということではなく、重要な掟の内容とか、種類とか意図などの議論でした。律法や掟に優劣をつけることを避ける傾向があったからです。

そしてすべての掟を守ることが大事だという結論となり、結果、すべては到底守りきれない民衆は掟を破る者という評価をくだされることとなります。

けれども主イエスさまは、ファリサイ派の人々の考え方を越えていきます。多くの聖書の中にある律法と掟の中から、信仰の核となる精神を取り出されました。それがわたしたちが全存在をかけて実践すべき、神さまへの愛、そして隣人への愛です。

加えて、主イエスさまは神さまへの愛と隣人への愛は決して優劣があるものではなく、「似ている」、つまり同等であるという意味の言葉によって、表裏一体の切り離せないものであることもお示しになりました。そしてこ

の2つの愛の実践という点からすべての掟を捉えることが重要だということを強調されたのです。

これは、主イエスさまのこれまでの宣教姿勢の奥深さをそのまま現しています。ことにマタイ5:17以下にあるように、「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだと思っ

てはならない。廃止するためではなく、完成するためである。」とおっしゃった主イエスさまのそれまでのお姿と重なります。律法や掟が人を排除するのではなく、ファリサイ派たちの聖書解釈や実践の狭さが人を断罪していたのです。そして愛に基づく生き方へとそもそも掟はすべての人々を招いており、神の愛を知っていなければ、隣人愛は成立しないことを宣言してくださいました。そのことによって、誰一人排除されることのない共同体の有り様をお示しくださいました。

さらに、律法のみについて問うてきたファリサイ派に対し、主イエスさまは預言者を加えることによって、神さまの働きは時代と状況の中で具体的に実現されていたことをも思い出させてくださいました。

わたしたちは、この21世紀のコロナ禍という具体的な歴史と状況の中であって、これまでと同様に今も、神さまから与えられた使命を果たすためにこのように集められています。わたしたちは、神さまがわたしたちに注いでくださっている愛のみ業をありとあらゆる世界の出来事の中から見出します。そしてその愛に応えるために招かれていることを覚えます。神さまへの愛、隣人への愛の実践こそが、わたしたちの為すべきことだからです。そのような共同体であるように、この礼拝を通して整えられ、わたしたちが力強くそれぞれの場所へと派遣されていくことができますように、聖霊のお導きを祈り求めます。